

# 与野南小だより

1月号 令和8年1月8日発行 第9号



さいたま市立与野南小学校 【児童数】計371名  
電話 831-0157



対話がつむぐ 未来のつながり

校長 土屋 智樹

新しい年を迎え、社会の変化を考えさせられる記事を目にしました。読売新聞の「共生のかたち」には、人口減少が進む中、日本人の担い手不足に悩む介護や農業といった分野で、外国人が重要な役割を果たしている現状が紹介されていました。ある特別養護老人ホームを運営する理事長が語った「人手不足は死活問題。外国人材は業務を維持するのに不可欠だ。」という言葉が強く印象に残りました。就労や就学を目的とした在留外国人は増加を続けており、2040年には人口の1割を占めるという予測もあるそうです。

こうした現実には、社会の基盤を支える場面だけでなく、すでに私たちの身近なところにも表れています。スポーツの世界では、海外にルーツを持つ人々が日の丸を背負い、第一線で活躍しています。NBAのレイカーズに所属する八村塁選手もその一人です。私は、異なる価値観を否定せず、多様な背景をもつ人が互いを認め合う社会こそが、私たちの未来を豊かにするのではないかと感じています。

一方で、多様性を受け止めるだけでは課題が残ります。オーバーツーリズムの深刻化や、外国人住民と地元住民との間で生じるトラブル等、現実には様々な問題があります。だからこそ、互いを理解しようとする対話が必要なのだと思います。言葉や文化の違いを超えて、相手を知ろうとする姿勢が、共生の第一歩です。そして、これは社会の問題に限らず、私たちの身近な関係にも当てはめることができます。親子や仲間との対話があるからこそ、信頼が生まれ、挑戦する勇氣につながっていくのだと感じています。

私自身、娘と一緒に家の近くを走った日々をよく思い出します。小学校2年生から6年生まで続けたマラソン。最初は走ることがあまり好きではなかった娘が、やがて自信をもち、走ることを楽しむようになっていきました。その背景には、毎日の対話があったからこそ続けられたのだと思います。「今日はどこまで走ろうか」「昨日より少し頑張ってみよう」——そんな何気ないやりとりが、娘に自信を与え、挑戦する力を育んだのではないかと振り返っています。親子で励まし合い、気持ちを確かめ合いながら続けた日々は、つながりが人を強くし、未来を切り開く力になることを私に教えてくれました。

私が願うのは、対話と協力が自然に息づき、一人ひとりの違いが力として生かされる学校です。子どもたちが安心して自分の思いを語り、仲間の考えに耳を傾けることができる場でありたいと考えています。時には意見がぶつかることもあるでしょう。しかし、その経験こそが、相手を理解しようとする心を育てます。異なる背景や考え方を持つ人と共に学ぶことは、これからの社会で欠かせない力です。結果だけを追い求めるのではなく、挑戦する過程を楽しみながら、自分の可能性を広げていく——そんな学びを、子どもたちと共に日々育んでいきたいと思っています。

新しい年、私は対話を大切に、つながりを力に変える学校づくりを進めていきます。皆様と共に、子どもたちが多様性を受け入れ、思いやりを育み、共に未来をつくる一年にしていきましょう。